

巻 頭 言

岡山県立岡山操山中学校

岡山県立岡山操山高等学校

校 長 武 内 洋 二

令和4年度はウイズコロナ、ポストコロナを合言葉に多くの学校行事をコロナ禍以前の形に戻し、徐々にではあるが、生徒達に体験的な学習の場を提供できはじめた。しかし、イノベーションなグローバル人材の育成の観点からすれば、できないことの方が多かった1年だったかもしれない。

リモートでの姉妹校（オーストラリア、セイクリット・ハート・カレッジ）との交流や岡山大学の留学生との交流などはできたものの、実際に現地に行き、その場の空気感を感じたり、対面で話をしたりはできなかった。リモートで現地に行かずとも交流ができるプラスの部分はある。しかし、現地、対面でしか感じられないものは大きい。生徒の心にその経験が深く残っているかといえば疑問が残る。生徒にとってはリモートでの交流も貴重な経験になったが、大学の先生方や大学生と交流しながら活動したグローバル合宿など人と人との生の関わりができたことや、普段と違う空気感を少しでも感じられたことはとても貴重な経験になった。

一方、取組の目玉である課題研究は、結果だけでなく、その過程に大きな成長や意味があること、結果として上手くいかなくてもそこに、次の課題を見つけ成長を続けていくことに価値を見いだして行くことが大切である。また、連携校の生徒とも発表を通じて交流ができ、お互いに違った視点からの発表に多くの気づきを得ることができた。

荘子の「秋水篇」の「井蛙不可以語於海者、拘於虚也」が由来とされている「井の中の蛙大海を知らず」という言葉がある。「井戸の中にいる蛙はずっと狭い世界しか見たことがなく、海を見たことがないため、視野が狭くありきたりの知識しかない。」というネガティブな意味で使われている。しかし、この言葉は日本に入ってきてから「井の中の蛙大海を知らず、されど空の深さを知る。」と「空の深さを知る」が付け加えられ、一つのことを突き詰めたことで、その世界の深いところまで知ることができたという、ポジティブなニュアンスが加わったようである。

令和5年度、本校はWWL最終年を迎える。「井の中の蛙大海を知らず」というネガティブな状況はどうしようもないが、そこを「井の中の蛙大海を知らずされど空の深さを知る」とポジティブに捉え、今できる一つ一つのことをより深く、積極的にチャレンジし、大海に飛び出していく土台としたい。